

## ***The Times of India* 紙デジタルコレクションが記録したスィク教徒の旅 ——パキスタン・イスラーム共和国におけるグルドワラー巡礼——**

須永 恵美子\*

Pilgrimage of Gurdwaras in the Islamic Republic of Pakistan:  
Sikhs' *Yatra* (journeys) in the Digital Archives of *The Times of India*

SUNAGA Emiko

Pakistan issues pilgrimage visas to Indian Sikhs in compliance with the '1974 Protocol on Visits to Religious Institutions.' In 2018, the Pakistan High Commission Office in New Delhi issued 3,800 visas to Indian Sikhs. Indian pilgrims enter Pakistan through the Wagah border by rail or road and undertake pilgrimage to several sites. Large groups are organised, especially on the death anniversaries of *gurus*, the Vaisakhi (harvest festival) in April and the Guru Nanak Jayanti festival in November. For a few days every year in November, thousands of Sikhs gather at the city of Nankana Sahib in Pakistan to celebrate Guru Nanak Gurburab—the birth anniversary of Guru Nanak, the founder of Sikhism. They arrive from India, the Middle East, the UK, Europe, Canada, the US, and all over the world. It is one of the biggest pilgrimages in the Islamic Republic of Pakistan. In this paper, focussing on the Sikh community, I clarified the historical situation of minority pilgrimages that has received very little attention in Pakistan and explored the social significance of these pilgrimages. An attempt was made to locate relevant articles from archives of *The Times of India*, an Indian newspaper, to reconstruct the historical narrative.

### I. はじめに

#### 1. 研究の背景

パキスタンとインドは、3,300キロメートルの陸上国境を共有しているが、歴史的及び国際政治的な背景から、国境を越えて移動することは難しい状況である。1947年まで、両国はインド亜大陸としての長い歴史を共有してきた。両国に親戚がいる世代や、独立宣言時に隣の国に移住した世代はまだ存命である。国境をまたぐ移動は紛争によりしばしば遮断され、パキスタン人もインド人も両国間を自由に行き来することができない。国際便はほとんど飛んでおらず、陸路は3千キロメートルの国境中数箇所しか——実態としてはラホールに近いワーカー国境のみしか——開通していない。国を超えて親戚がいる家族でも、ビザを取得することは極めて困難である。しかし、この難しい両国関係の中でも、巡礼は続けられてきた。

パキスタンは多民族社会であり、言語的にも、民族的にも多様である。宗教については、「パキスタン・イスラーム共和国」という国名の通り、イスラームを国教に定めており、人口の97%はムスリムである。残りの3%は、憲法により信仰の自由が保証された宗教的少数派で構成されている。人口の1.6%はキリスト教徒、1.5%はヒンドゥー教徒、残りの0.1%はゾロアスター教徒、仏教徒、スィク教徒、カラーシュである。少数派の宗教の中でも、スィク教は特に限定的で、報道や関係団体の統計によると、パキスタン国内に住むスィク教徒は6,000人から50,000人と推定されている。一方、インドには200万人のスィク教徒がおり、人口の2%を占めている [Census of India 2001]。

\* 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門

パキスタンとインドが1947年に独立国家となった際に、一部のシク教徒はインドに移住した。その後、両国の国境が閉鎖され、両国間の往来が規制されるようになった。1960年代に多数のシク教徒がイギリスやカナダに移住した社会的背景があり、1970年代に入るとシク教の研究が本格化した [Cole and Sambhi 1978]。パキスタンでは、シク教徒の人口や社会的露出が低減したこともあり、シク教関連研究は限定的であった。しかし、2018年にパキスタンとインドの間で巡礼用の新たな通過点が開かれたことをうけ、2019年頃からはパキスタンのシク教徒に関する研究が急速に増加し始めた [Bainiwal 2020; Roy and Shaukat 2020; Abbasi 2021; Singh 2021]。ただ、一般的にはパキスタンにおいてシク教に対する関心は低く、ヒンドゥー教と混同されることもある [Singh I. 2020]。多宗教を学ぶ学校の教科書でさえイスラーム、キリスト教、ヒンドゥー教にしか言及していない [須永 2013]。

## 2. 先行研究と本論考の目的

シク教徒の巡礼に関する研究の潮流としては、インドの聖都アムリトサルAmritsarの黄金寺院とパンジ・タフトPanj-Taft (グル由縁のインドの5つの聖地) を巡る大規模な巡礼の実証研究が多い [Kumar 2021]。このほか、インドのシク教研究に比べると圧倒的に少数にはなるものの、パキスタンの聖地管理を対象とする研究もいくつか見受けられる。例えば、[Singh G. 2020] では、パキスタン側に残るうち最も重要な聖地のひとつであり、インドからごく近い距離にあるカルタールプールへのアクセスを制限・管理することで、シク教徒コミュニティを宗教的及び政治的に統制し、適応化させるためのリソースとして、巡礼を捉えている。[Talbot 2010] では、パキスタン政府のシク教に対する文化政策を、戦略的というよりも日和見主義的と分析しており、これは本論考においても同意する点である。

本論考では、パキスタンの主にパンジャブ州で行われるシク教徒の巡礼に着目し、少数派の巡礼の歴史を明らかにし、その巡礼の社会的意義を考察する。また、近年注目を集めるようになったシク教徒の巡礼をパキスタン側がどのように掌握し、管理しようとしているのか、観光業の発展との関連性について考察する。本論考では、インドの大手英字新聞タイムズオブインディア紙 (*The Times of India*) のデジタルアーカイブを一次資料として、(i) 新聞記事を通してその歴史の変遷を明らかにし、(ii) 現在起きている関連のトピックおよび傾向を分析した。使用した ProQuest Historical Newspapers: The Times of India は、ProQuest が提供する歴史新聞データベースで、同紙の前身である *The Bombay Times and Journal of Commerce* (1838年創刊) から現代まで700万件以上の記事をデジタル化している。同データベースは、広告や写真を含む全文を PDF 形式で提供しており、メタデータを含めて本文のテキスト検索が可能になっている。

## II. シク教巡礼の概説

### 1. 巡礼の目的および意義

シク教は、約500年前に起こった宗教で、宗教的指導者である10人のグルの教えに基づいている。初代グル・ナーナクからグル・ゴーヴィンド・シングまで240年の間に、10人のグルが誕生した。特に重要な人物は、初代のナーナク・デーヴ・ジー (1469–1539) である。ナーナクは現パキスタン側のパンジャブに生まれ、そこでシク教の宗教哲学の礎を築いた。語り継がれているナーナクに関する宗教的な逸話の舞台も現パキスタン領のパンジャブであり、彼が生涯を終えた場所でもある。5代目のグル・アルジャン (1581–1606) はラホールで殉教し、デーラー・サーヒブ

の寺院は彼の殉教を記念したものである。このように、現在パキスタンの領土である西パンジャーブには、シク教のグルたちの歴史関連の聖地が点在している。

シク教徒の巡礼はヤトラ (yatra) と呼ばれており、これは旅や行列・行進を意味する単語で、南アジアではヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教でも使われる。シク教徒の巡礼の目的は、彼らの歴史と伝統に関係する場所に敬意を払うことにある [Jutla 2006]。イスラームのハッジやウムラと異なり、シク教において巡礼は宗教的義務として定められていない。一方で、シク教はコミュニティの歴史を重要視するため、特定のルートはないものの歴史的なグルドワラーへの訪問が好まれている。グルドワラーとは、寺院、礼拝施設、集会所のための場所である。もっとも有名なグルドワラーとして、アムリトサル黄金寺院がある。

## 2. パキスタンにおけるグルドワラー

1947年のインド・パキスタン分離独立の際、パキスタン領のシク教徒の多くはインド側に移住

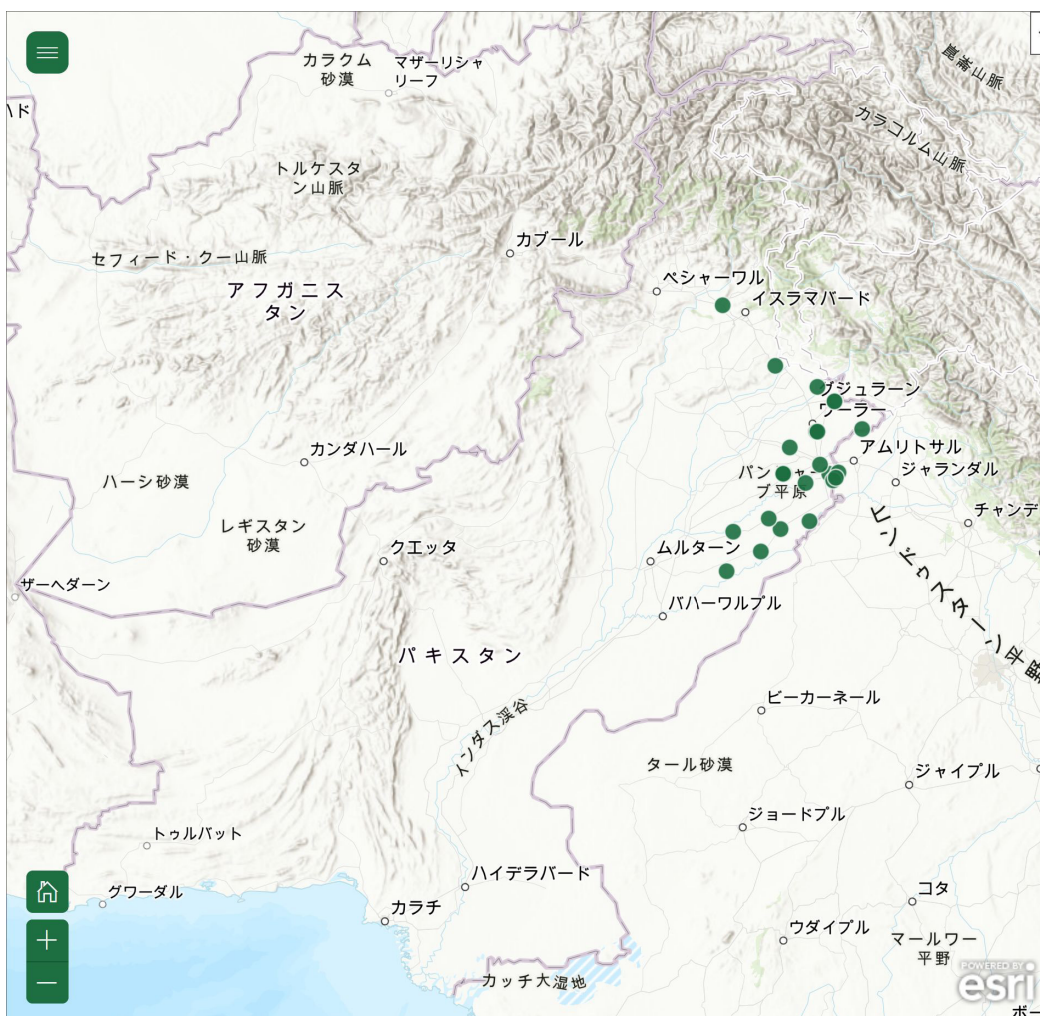


図1 パキスタンにおけるグル・ナーナクに関連する寺院

出典 [Khan 2000] をもとに筆者作成

したため、現在のパキスタンにはシク教徒はほとんど居住していない。しかし、シク教の創始者であるグル・ナーナク関連施設をはじめとし、グルドワラーは国内に複数残されている。

歴史的には、現在のパキスタン領に約 300 箇所のグルドワラーがあったとされており、現存するのは 126 箇所である [Askari 2019; PTDC 2021]。西パキスタン (現在のパキスタン) に残るグルドワラーの調査を行ったハーンの研究によると、グル・ナーナクに関連する 28 の寺院がパキスタンにあり、その中には、彼の生誕地であるナンカーナ・サーヒブと彼が埋葬されたカルタールプールの霊廟も含まれている [Khan 2000]。パキスタンでは、古代遺跡保護法 (1904 年) の下、考古学庁が先史時代、仏教時代、ヒンドゥー王朝時代、イスラーム時代の重要な遺跡の調査を行ってきた [Khan 2000]。考古学の研究者であるカイセルは、パキスタンにある約 200 箇所の歴史的なグルドワラーについての概要を説明している [Qaiser 1998]。

パキスタンには初代グル・ナーナクに関する寺院が多く残されており、2 代目、3 代目、7 代目、8 代目、9 代目のグルのために建立されたグルドワラーは現存しない。図 1 および表 1 は、パキスタン国内の初代グル・ナーナクに由縁のグルドワラーである。すべてパンジャープ州内に所在することがわかる。

表1 パキスタンにおけるグル・ナーナクに関連する寺院

	地区	寺院の名称
1	アトック	Gurdwara Panja Sahib (Hasan Abdal)
2	グジュラーンワラー	Chaki Sahib
3		Gurdwara Rori Sahib (Eminabad)
4		Khoi Bhai Lalu (Eminabad)
5	グジャラート	Gurdwara Kir Bawa Sahib (Jai Sukh, Tahsil Phalia)
6	ジェラム	Gurdwara Choa Sahib (Rohtas)
7	ラホール	Dera at Chahal (Police Station Barki)
8		Dharamsala Nankiana (Alpa, Tahsil Lahore)
9		Dharamsala Chhota Nankiana (Manga Chhota)
10		Dharamsala Sat Guru Nanak (Lahore)
11		Gurdwara and Tank (Jahman village)
12		Gurdwara at Ghawindi (Police Station Barki)
13	Gurdwara at Kanganpur (Tahsil Chuniyan)	
14	モンゴメリー	Gurdwara (Dipalpur)
15		Gurdwara Nanak Jaagir (Tahsil Okara)
16		Gurdwara Nanaksar (Harappa)
17	Gurdwara Tibba Baba Nanak Sahib (Chak I/EB, Tahsil Okara)	
18	ムルターン	Gurdwara Diwan Chawali Mashaykh (Chak 317, Tahsil Vehari)
19	シェイフプーラー	Gurdwara Bal Lila (Nankana)
20		Gurdwara Janam Asthan (Nankana)
21		Gurdwara Kiara Sahib (Nanakana)
22		Gurdwara Mal Ji Sahib
23		Gurdwara Maulvi Patti (Nankana Sahib)
24		Gurdwara Sachcha Sauda (Chauharkana)
25	Gurdwara Tambo Sahib (Nankana)	
26	シールコート	Gurdwara Bairi Sahib (Sialkot)
27		Gurdwara Baoli Sahib (Sialkot)
28		Gurdwara Darbar Sahib (Kartarpur)

出典 [Khan 2000] をもとに筆者作成

ラホールには、グル・ラーム・ダースに捧げられたグルドワラーが1箇所、グル・アルジャン・デーヴに捧げられたグルドワラーが8箇所、グル・ハルゴーヴィンドに捧げられたグルドワラーが12箇所ある [Khan 2000]。また、これらのグルにまつわるグルドワラーのほか、日常の修行の場である83箇所の施設も記録されている [Khan 2000]。

パキスタンの有名なシク教巡礼地は、ナーナクに関連する3つの聖地にラホールのグルドワラーを加えた、以下の4箇所である。

- 1) ナンカーナ・サーヒブ——グル・ナーナクの出生地に建てられた、グルドワラー・ジャンム・アスタン
- 2) パンジャー・サーヒブ——ナーナクが投げられた岩を手で受け止めたという伝説があるハサン・アブダルのグルドワラー
- 3) カルタルプール——ナーナクが初めてシク教コミュニティを設立し、生涯を終えた場所であるダルバル・サーヒブ
- 4) デラー・サーヒブ——グル・アルジャンが殉教したラホールのグルドワラー

### 3. 巡礼の時期

巡礼は、4月、5月、11月に集中している。4月は10代目のグルに関連したバイサーキー(収穫祭)があり、5月と6月にはグル・アルジャン殉教の追悼があり、11月はグル・ナーナクの誕生月である。ナーナクの誕生日は、特にナンカーナ・サーヒブで盛大な儀式が行われる祭日となっている。1928年のナーナクの生誕祭には、8万人の巡礼者がナンカーナ・サーヒブに集ったと記録されている [The Times of India 1928 (November 29)]。また、次の新聞記事では、20世紀初頭の祭日の盛り上がりの様子が記録されている。

シク教の祭日、祝いの中心地。11月8日は、パンジャープ州とスインド州の全域、そして、シク教徒が居住しているインド国内の他の地域でも大々的に祭日として祝われた。シク教の開祖、偉大なるナーナクの生誕記念日だった。(中略)しかし、生誕祭の祝いの中心地となったのは、偉大な指導者が439年前、満月の真夜中に生まれた場所、ラホール地区のナンカーナ・サーヒブ村であった。ラホールから50マイル強に位置するこの村には、毎年、パンジャープ州とスインド州の各地から大勢の巡礼者が集まる。巡礼者は、祭日の数日前に訪れ、祭日の次の日まで滞在する。当日は貧しい者達に食事が振舞われる。グラントが朗読され、聖歌が歌われ、大勢の人々は夜通し寝ないで過ごす。ちょうど午前零時、グルが誕生した時間に、信者たちの熱気が最高潮に達すると、祝いの場である寺院には、金銭や宝石、衣服が奉納される。より熱心で正統派の巡礼者たちの間では、寺院に裸足で歩いて行くことが大きな宗教的美徳だと考えられている。 [The Times of India 1908 (November 10)]

### 4. 巡礼の経済的影響

ナンカーナ・サーヒブを始め、パキスタンのシク教の聖地はインドのシク教徒にとって長い間魅力的な巡礼地であった。シク教徒の巡礼は、人の移動と経済力の主要な要因として、鉄道建設にも大きな影響を与えた。次の記事では、路線上に巡礼地があるノース・ウェスタン鉄道の重要性が述べられている。



ナロワールから約9マイルの地点でラヴィ川を越える必要があったため、ヴェルカ〜デーラーババナーナク区間を支線として開通することが早期に決定された。シク教徒コミュニティにとって非常に神聖な二つの場所である、アマリトサルとデーラーババナーナクとの間で列車の先行運行ができるようになった。ラヴィ川を越えるこの最後の区間が開通すると、私たちが立っているところから見えるもう一つの神聖な寺院、ダルバル・サーヒブ・カルタルプールも、アマリトサルにかなり近くなる。 [The Times of India 1929 (May 8)]

タイムズオブインディア紙では、1935年、5万人の巡礼者のためにパンジャープ州の主要駅から特別列車が用意されたことについて報道されている。

インド各地から50,000人超のシク教徒が今日、シク教の開祖であるグル・ナーナクの誕生日を祝うために、ナンカーナ・サーヒブに集まった。ナンカーナ・サーヒブは、ラホールから約50マイル離れた小さな村である。そこは、グル・ナーナクの出生地である。ノース・ウェスタン鉄道は、巡礼者の利便性を図るために最大の配慮をし、パンジャープ州の全ての主要な駅から多くの特別列車を運行させた。パンジャープ州公共事業部(保健部)は、幾つかの管井戸と専門の清掃員を用意した。村の祭事場周辺には特別警察が配置され、州主催者の本部からは大規模なボーイスカウト隊が派遣され、大変有益な奉仕を行った。現地のグルドワラーの寺院運営委員会は、当局の支援の下、祝祭の完璧な運営を行い、約75万人の男女や子供たちのために無料の食事処を提供するなど、様々な面で快適であるように努めた。

[The Times of India 1935 (November 11)]

1920年には、グルドワラーの運営・管理の決定権を持つシロマニ・グルドワラー寺院運営委員会(Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee: SGPC)が組織され、シク教の聖地へ旅行団の派遣を管理することが定められた [Cole and Sambhi 1978]。

### III. インドからパキスタンへの巡礼

#### 1. 独立と国境線——国際巡礼への転換の影響

1947年にパキスタンとインドが二つの国家に分離されたことは、シク教徒の巡礼の在り方を大きく変えた。パンジャープ州をインド・パキスタンの国境が通るため、シク教徒がパスポートとビザなしでナンカーナ・サーヒブやカルタルプールへ行くことができなくなり、パンジャープ州内の自由な移動が制限されるようになった。独立直後の巡礼は、平和的に行われた様子が記録されている [The Times of India 1949 (November 4)]。

「我々は、ナンカーナ・サーヒブ訪問で最高に快適な体験をし、グルドワラーの外に集まった大勢のムスリムからも敵意のようなものは全く見られなかった。むしろ、パキスタンの警察と人々の対応は思いやりそのものだった。」という感想を、巡礼から戻った、S.I.P.C.<sup>1)</sup> 委員長代行および50人のシク教徒の団体(ジャタ)のリーダーであるサルダル・バサントシング・モガ氏は述べた。 [The Times of India 1948 (November 20)]

1) S.G.P.C.(シロマニ・グルドワラー寺院運営委員会)の誤記と思われる。

巡礼者の派遣にあたっては、シロマニ・グルドワラー寺院運営委員会は、独立後もインドからパキスタンへの巡礼者の派遣のとりまとめを行っていた [*The Times of India* 1948 (November 20)]。

シロマニ・グルドワラー寺院運営委員会は本日、分離後初めてパキスタン政府から、40人のシク教徒巡礼者の団体(ジャタ)をグルドワラー・カルタールプール<sup>2)</sup>・サーヒブへ派遣する許可を得た。ジャタは4月10日～4月14日に当寺院を訪れ、S.G.P.C.は、巡礼参加希望者に対して、パタラのサルダル・サント・スィング・スィンバルと連絡を取るよう指導した。

[*The Times of India* 1954 (March 25)]

## 2. 聖地の管理問題

一方で、受け入れ側のパキスタンでは、シク教聖地の管理が問題となった。

独立後、パキスタンに残ったシク教徒の人口は少なく、寺院の管理が滞りようになった [Cole and Sambhi 1978]。このため、国内のグルドワラーは、避難者信託財産委員会 (Evacuee Trust Property Board) が管理するようになった。避難者信託財産委員会は、インド・パキスタン分離独立の際にインドに移住したシク・ヒンドゥー教徒の財産や土地の管理を行うために1960年にラホールで設立された [ETPB 2022]。これは、少数派の権利を保証する1950年のネルー・リヤーカート協定とパント・ミルザー合意(1955年)に基づく仕組みである [ETPB 2022]。例えば、カルタールプールのグルドワラーの修繕事業は復興庁が行い、パキスタン政府もその管理者に指定されてきた [Khan 2000]。管理はパキスタン政府に委任されているものの、信者や参拝者なしには、その維持は難しい [*The Times of India* 1948 (November 16, November 20)]。多くのシク教徒がインドに移住した後、管理が行き届いていないことを伝えている記事もある。

西パンジャブのシク寺院——巡礼者の不満。パキスタン当局は、グルドワラー・ナンカーナ・サーヒブでのグル・グラント・サーヒブの朗読を規制し、西パンジャブの様々な寺院とグルドワラーの状況は悪化している。このことについて、グル・ナーナクの誕生日を祝うために200人を超えるシク教徒巡礼者と一緒になンカーナ・サーヒブを訪れた著名な巡礼者が報告している。

[*The Times of India* 1951 (November 16)]

両国の分離独立と相次ぐ紛争により、インドからパキスタン訪問の一般的な観光ビザを取得することはほぼ不可能である。その後、両国間には、1974年の宗教施設訪問に関する議定書の二国間協定が締結された。この協定に基づき、パキスタンのムスリム、インドのヒンドゥー教徒とシク教徒は、相手国の聖地に巡礼できることになっている。

この協定は主にインドのシク教徒のための巡礼ビザであり、4月、5月、11月には巡礼者専用の特別列車と直通バスが運行される。最近では、2018年に在ニューデリー・パキスタン高等弁務官事務所がインドのシク教徒に対して3,800件のビザを発給している [HCP 2018]。

## 3. 巡礼の中止・拒否

タイムズオブインディア紙では、パキスタン高等弁務官事務所による巡礼ビザの支給数を報道し

---

2) 原文は Gurdwara Kartaur Sahib と表記されていた。

ている。図2は、こうした報道をもとに、巡礼者としてパキスタンを訪問したインドのスィク教徒の人数をまとめたものである。

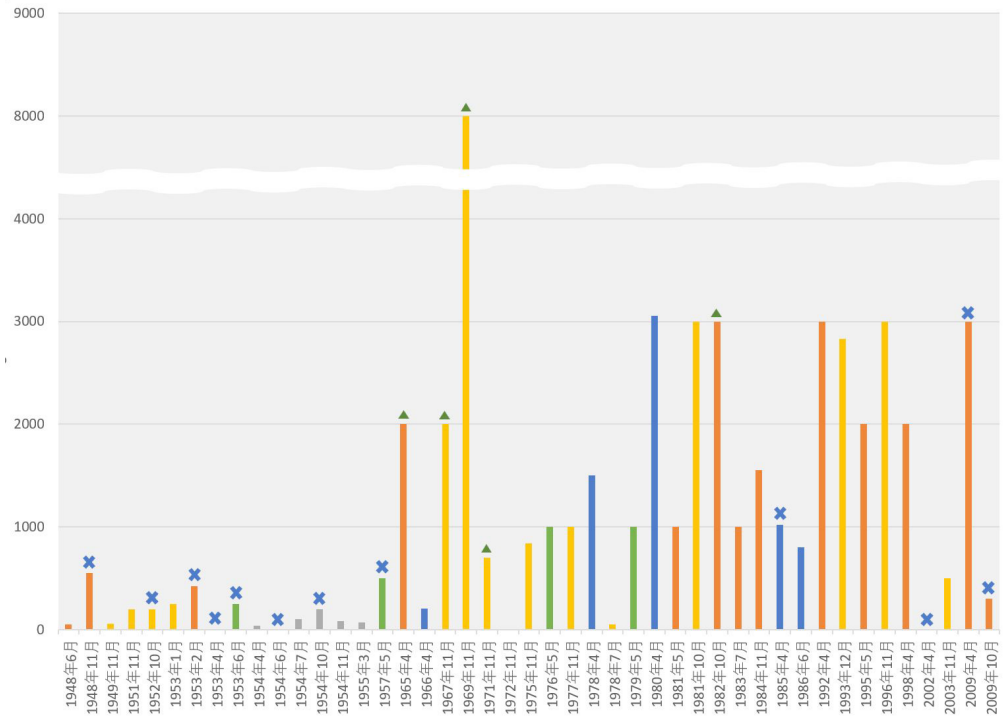


図2 パキスタンへの巡礼者の人数(1948～2009年/人)

出典 The Times of India 紙(1948～2009年)をもとに筆者作成

図2のグラフの色はそれぞれ目的地を表しており、黄色はナンカーナ・サーヒブ、青はパンジャー・サーヒブ、緑はラホール・デーラー・サーヒブ、橙は複数の聖地、灰色はハラッパーやラーワルピンディーなどその他のグールドワラーを示している。さらに棒グラフの上にバツ印がつけられた巡礼では、ビザが申請または許可されたものの、何らかの事情によって巡礼がキャンセルされたり、渡航を拒否されたことを示している。1947年の独立から直後の第1次印パ戦争、1965年の第2次印パ戦争に至るまでは、何度も巡礼が中止・拒否されている。また近年では、2008年11月にムンバイでテロ事件が発生し両国関係が緊迫したため、安全上の懸念から、旅行団がラホールまで到着していたにもかかわらず、巡礼が中止となった[The Times of India 2009 (October 13)]。

巡礼者数の傾向を見ると、分離独立直後は顕著に巡礼者数が減り、1960年代になってやや回復してきていることがわかる。1980年代以降は、一度に3,000人近くが訪問しているが、乱高下が激しい。

両政府の事情により、巡礼が許可されない年もあった。例えば、1948年のナーナク生誕祝賀の巡礼団は、安全上の懸念により大幅に縮小された。



西パンジャブ州政府は土曜日、東パンジャブ州政府が要請した500人ではなく、50人のシク教徒に対して、シク教の開祖であるグル・ナーナクの誕生日に際して、ナンカーナ・サーヒブを訪問することを許可することを決定した。(中略)西パンジャブ州首相は土曜日の夕方、カラチからラホールに戻り次第、西パンジャブ行政長官の Fida Hussain 氏と警察監察総監との緊急会合を行い、関連したリスクと問題点を考慮して、500人は対応できない人数であり、西パンジャブ州政府が安全を保証できるのはシク教徒50人のみとすることで意見が一致した。 [The Times of India 1948 (November 15)]

特に、インドとパキスタンの政治的な関係が悪化したことにより巡礼が度々取りやめとなっていた。1972年は、バングラデシュ独立戦争のため、インドからの巡礼者は派遣されなかった。以下1974年の記事では、第3次印パ戦争を挟み、インドからの巡礼者がしばらく途絶えていたことがうかがえる。

パキスタン政府は、シク教徒巡礼者がグル・ナーナクの生誕記念日に参詣するために、11月26日から12月2日までのグルドワラー・ナンカーナ・サーヒブへの訪問を許可することに合意した。外務省は昨日、パキスタンのこの決定をシロマニ・グルドワラー寺院運営委員会に伝えた。この時点では、直ぐには何人の巡礼者がこの有名な寺院を訪問することを許可されるのかは不明だ。1969年以来、このグルドワラーを訪れる本国からの巡礼者はいない。

[The Times of India 1974 (October 26)]

パキスタン政府側が巡礼ビザ発給拒否の理由を提示しなかった年もあり [The Times of India 1952 (October 23)]、別の年には祭日よりも遅れ、関連行事に間に合わないタイミングで許可証が発行されたという苦情も記録されていた [The Times of India 1953 (May 27)]。他にも巡礼団は派遣できたものの、規模を縮小した年もある [The Times of India 1985 (March 5)]。

このように、インドからパキスタンへのシク教徒の巡礼の需要は常にあったが、巡礼者のモビリティは二国間関係の駆け引き材料となり、常に不安定な状況にさらされてきたことがわかる。

#### IV. おわりに

##### 1. シク教ディアスポラの巡礼

本稿では、インドからパキスタンへのシク教巡礼について、その概要と巡礼の実態を英字新聞のデジタルアーカイブから再構築してきた。インド・パキスタンにおける巡礼は常に不安定な二国間関係を翻弄されてきたが、聖地への希求はやまず、2018年のカルタールプール巡礼回廊の開通につながった。

最後に、パキスタンが受け入れるもう一つのシク教巡礼者である、ディアスポラについて述べたい。海外在住のシク教徒はおよそ200万人と見積もられており、その多くが英領植民地期や印パ分離独立時に移住したグループである [Singh 1993]。移住先としては米国、カナダ、イギリス、マレーシア、タイ、UAE、イタリア、イランおよびイギリス統治下の香港などがある。シク教ディアスポラは、1970年代から、インド本国と離れた移住先の地での巡礼を始めていることが報告されている [Tatla 1998]。現在は、各地でシク教コミュニティの形成について議論がなされている [Dusenbery 2008]。

シク教ディアスポラは、パスポートと経済状況という二つのアドバンテージから、インドやパキスタンへの渡航が行いやすかった。

シク教徒巡礼者、カナダからインドへ——シロマニ・グルドワラー寺院運営委員会は、(中略)長い間、カナダのシク教徒から相当な資金援助を受けてきた。(中略) S.G.P.C. には、カリフォルニア、イラン等のシク教徒コミュニティと同様に、カナダにも名目上、一つか二つの選挙区がある。このような選挙区は、委員会の代表者を選出することとなっており、全員が委員会の活動をなんらかのかたちで支援することが期待されている。先日、多くのカーブルのシク教徒は、委員会の支援のためにインドへの渡航許可をアフガン政府に申請した。

[The Times of India 1924 (July 21)]

2016年、シンガポールを拠点とする写真家アマルディーブ・シング氏が『失われた遺産——パキスタンにおけるシク教のレガシー』と『続く探求——失われた遺産——パキスタンにおけるシク教のレガシー』という紀行文を続けて出版し注目を浴びた [Singh 2016, 2018]。さらにアメリカのダルビール・シング・パヌ氏は自著『シク教の遺産——国境を超えて』 [Pannu 2019] にて、復興される直前のカルタールプールを含め、84箇所のグルドワラーに関する記録を残している。両氏もシク教ディアスポラである。

南アジア以外からの巡礼者の人数は近年増加傾向にある。その理由は二つあり、i) インドのシク教徒と異なり巡礼ビザが不要で、取得が容易な観光ビザで入国できること、ii) 経済的に海外旅行をする余裕があることが挙げられる。

皆の話によると、西側諸国から来た裕福に見えるシク教徒は、他の巡礼者と異なり、グルドワラーには泊まらず、ラホールのホテルを活動の拠点としていた。彼らはリムジンに乗ってナンカーナ・サーヒブを毎日数時間小グループで訪れ、インドからの巡礼者の小規模な団体と個別に接触していた。

[The Times of India 1984 (November 14)]

## 2. 聖地から観光資源へ

旅行会社を通じた巡礼ツアーのなかには、パキスタンや時にはインドとパキスタン両方を訪れるケースもある [Australian Sangat Nankana Sahib Charitable Organisation Incorporated n.d.; Nankana Sahib Travel & Tour n.d.; Toppa 2019]。このような外国からの巡礼者は裕福であり、パキスタン政府は外貨獲得の貴重な収入源と考えている。

デジタルアーカイブから明らかなこととして独立前の数十万人もの巡礼者の数も、巡礼者向けに建設された鉄道の数も、独立後には減少している。また、巡礼は、度重なる両国関係の悪化、各国の事情や安全保障上の理由で中止に追い込まれることもしばしばある。シク教ディアスポラの巡礼を考慮しても、巡礼者の人数は独立前のレベルには達していない。

シク教巡礼の課題は、聖地としてのインフラが整備されていないことにある。カルタールプールやナンカーナ・サーヒブなど著名な聖地以外の遺跡は管理が行き届かず、一部荒廃し廃墟と化している。これに対し、2018年のイムラーン政権以降、パキスタン政府は観光立国を目指しており、シアルコートへのヒンドゥー寺院、マルダーンの仏教遺跡の修繕を含め、宗教ツーリズムも観光戦略に組み込んでいる。パキスタン政府観光開発公社も、それまでトレッキングなど北方山岳地域を

押し出していた方針を修正し、カルタールプールのグルドワーラーの案内をウェブサイトのトップページに打ち出すなど、宗教観光に乗り出したところである [PTDC 2021]。

## 参考文献

<書籍・雑誌論文>

須永恵美子 2013 「イスラーム国家としてのパキスタンにおける歴史言説」『アジア・アフリカ地域研究』12(2), pp. 157–191.

Abbasi, Abdus Sattar. 2021. *Tourism Destinations in Pakistan*. Lahore: Allied Book Company.

Askari, Y. 2019. “Kartarpur: The Corridor of Hope,” *Destinations: Across Pakistan* 21, pp. 104–107.

Bainiwal, T. S. 2020. “Religious and Political Dimensions of the Kartarpur Corridor: Exploring the Global Politics behind the Lost Heritage of the Darbar Sahib,” *Religions* 11(11), p. 560.  
<DOI:10.3390/rel11110560>.

Census of India. 2001. *Religion*. Delhi: Office of the Registrar General & Census Commissioner, India.

Cole, W. O. and P. S. Sambhi. 1978. *The Sikhs: Their Religious Beliefs and Practices*. Portland: Sussex Academic Press. (溝上富夫訳 1986 『シク教——教義と歴史』筑摩書房)

Dusenbery V. A. 2008. *Sikhs at Large: Religion, Culture, and Politics in Global Perspective*. Delhi: Oxford University Press.

Jutla, R. S. 2002. “Understanding Sikh Pilgrimage,” *Tourism Recreation Research* 27(2), pp. 65–72.  
<DOI:10.1080/02508281.2002.11081222>.

———. 2006. “Pilgrimage in Sikh Tradition,” in D. Timothy and D. Olsen (eds.), *Tourism, Religion and Spiritual Journeys*. London: Routledge, pp. 206–219.  
<DOI:10.4324/9780203001073>.

Khan, M. W. K. 2000(1962). *Sikh Shrines in West Pakistan*. New Delhi: Kalpaz.

Kumar, A. 2021. “Shiromani Akali Dal (1920–2020): Ideology, Strategy, and Support Base,” *Sikh Formations: Religion, Culture, Theory* 17(1–2), pp. 34–56.  
<DOI:10.1080/17448727.2021.1873654>.

Pannu, D. S. 2019. *The Sikh Heritage: Beyond Borders*. California: Pannu Dental Group.

Qaiser, I. 1998. *Historical Sikh Shrines in Pakistan*. Lahore: Punjabi History Board.

Roy, M. I. and M. S. Shaukat. 2020. “Kartarpur Corridor: A Gate Way to Peace in South Asia (Evolution, Development, Prospects & Implications),” *Journal of Politics and International Studies* 6(1), pp. 121–135.

Singh, A. 2016. *Lost Heritage: The Sikh Legacy in Pakistan*. New Delhi: The Nagaara Trust in association with Himalayan Books.

———. 2018. *The Quest Continues: Lost Heritage The Sikh Legacy in Pakistan*. New Delhi: Himalayan Books.

Singh, G. 2020. “The Control of Sacred Spaces: Sikh Shrines in Pakistan from the Partition to the Kartarpur Corridor,” *Sikh Formations: Religion, Culture, Theory* 16(3), pp. 209–226.  
<DOI:10.1080/17448727.2019.1593305>.

- . 2021. “Reconsidering Sikh architectureThe Samādhi of Maharaja Ranjit Singh in Lahore,” *Sikh Formations: Religion, Culture, Theory* 17(4), pp. 519–529.  
<DOI:10.1080/17448727.2021.1886403>.
- Singh, I. 2020. “Sikh and Sindhi Hindus: The History and Overlap,” *Abstracts of Sikh Studies* 22(3), pp. 38–47.
- Singh, N. K. 1993. *Sikhism*. New York: Facts on File.
- Talbot, I. 2010. “Pakistan and Sikh Nationalism: State Policy and Private Perceptions,” *Sikh Formations: Religion, Culture, Theory* 6(1), pp. 63–76.  
<DOI:10.1080/17448727.2010.484139>.
- Tatla, D. S. 1998. *The Sikh Diaspora: The Search for Statehood*. London: Routledge.  
DOI:10.4324/9780203982600

<新聞資料>

*The Times of India*. 1908–2009. *The Times of India*.

- . 1908 (November 10). “Sikh Gala Day,” *The Times of India*.
- . 1924 (July 21). “Sikh Pilgrims from Canada to India,” *The Times of India*.
- . 1928 (November 29). “Sikh Festival,” *The Times of India*.
- . 1929 (May 8). “Railway Progress in Punjab,” *The Times of India*.
- . 1935 (November 11). “50,000 Sikh Pilgrims at Nankanasahib Guru Nanak’s Birthday,” *The Times of India*.
- . 1948 (November 16). “Sikh “jatha” for Nankana Saheb,” *The Times of India*.
- . 1948 (November 15). “Sikh Pilgrimage to Nakana Saheb,” *The Times of India*.
- . 1948 (November 20). “Jatha’s Visit to Nankana Sahib Sikh Leader Gratified,” *The Times of India*.
- . 1949 (November 4). “Sikh Pilgrims,” *The Times of India*.
- . 1951 (November 16). “Sikh Temples in West Punjab Pilgrim’s Complaint,” *The Times of India*.
- . 1952 (October 23). “Current Topics: Nankana Sahib Abolishing Pensions,” *The Times of India*.
- . 1953 (May 27). “Current Topics: Sikh Pilgrims Mutually Suspicious,” *The Times of India*.
- . 1954 (March 25). “Pakistan Grants Permission Entry of Pilgrims,” *The Times of India*.
- . 1957 (May 22). “Karachi Refuses Visas: Sikh Pilgrims,” *The Times of India*.
- . 1974 (October 26). “Pindi to Allow Sikhs to Visit Nanak Gurdwara,” *The Times of India*.
- . 1984 (November 14). “Indian Sikhs Rebuff Foreign Separatists,” *The Times of India*.
- . 1985 (March 5). “SGPG not to Send Pilgrims to Pak,” *The Times of India*.
- . 2009 (October 13). “Indian Sikh Pilgrims Told to Call off Pak Tour,” *The Times of India*.

<オンライン資料>

Australian Sangat Nankana Sahib Charitable Organisation Incorporated. n.d. *Facebook Page*.  
<<https://www.facebook.com/Australian-Sangat-Nankana-Sahib-Charitable-organisation->

incorporated-2383603371852139/> (2023年11月30日閲覧).

ETPB (Evacuee Trust Property Board). 2022. *Evacuee Trust Property Board*.

<<https://etpb.gov.pk/about-us/>> (2023年11月30日閲覧).

HCP (High Commission for Islamic Republic of Pakistan). 2018. "Pakistan Issues over 3800 Visas to Sikh Pilgrims on the Eve of Baba Guru Nanak Birth Anniversary Celebrations," <<https://pakhcnewdelhi.org.pk/pakistan-issues-over-3800-visas-to-sikh-pilgrims-on-the-eve-of-baba-guru-nanak-birth-anniversary-celebrations/>> (2023年11月30日閲覧).

Nankana Sahib Travel & Tour. n.d. *Facebook Page*.

<<https://www.facebook.com/NANKANASAHIBTOUR/>> (2023年11月30日閲覧).

PTDC (Pakistan Tourism Development Corporation). 2021. *Pakistan Tourism Development Corporation*. <<https://www.tourism.gov.pk/>> (2023年11月30日閲覧).

Toppa, S. 2019. "Sikhs mark Guru Nanak's 550th Birth Anniversary in Pakistan," *AlJazeera*.

<<https://www.aljazeera.com/news/2019/11/12/sikhs-mark-guru-nanaks-550th-birth-anniversary-in-pakistan>> (2023年11月30日閲覧).